

< 図書紹介 >

黒岩俊郎・玉置正美著

『産業考古学入門』

「学」という文字が入っているのかでいかめしい感じをうけるかも知れないが、わが国の技術の歴史を、身近かに感じさせながら、楽しく読ませる本である。「序章 産業考古学の旅」は、まず、「丸木舟をたずねて」と題して著者（玉置）がわが国でつい最近まで実際に使われていた丸木舟を保存しているあちこちの博物館をたずね歩いた記録から書き始められている。二節は「先達の研究に学ぶ」と題した舟の歴史とその調べ方の概略である。著者のこうしたいわば日本技術史みてある記がいたる所にちりばめられているのが本書の特色のひとつである。ざっとあげてみると、外房の風車、日本の水車、京都蹴上の水力発電所、新潟の石油井戸、鹿児島根合のたたら炉、神子畑（生野）の鑄鉄橋、伊豆梨本の煉瓦洞、土肥の金山、越後地方のアルキメデス・ポンプ、各地の揚水器具、脱穀・調製用具の変遷、足尾の鉍毒記念碑、筑豊の炭住街とポタ山、等々である。技教研の青木不二夫さんが精力的に調べている「上総掘り」も紹介されている（97～98ページ）。

著者（玉置）は、「日本では草創期なのでまだ確立された定義はないが、私なりの産業考古学の定義、考え方をまとめてみると、『産業考古学とは産業記念物の保存と研究に関する学問である』ということになる」としている。そして、この「産業記念物は動かすことのできない生産設備（鉍山製錬設備、工場、鉄道、運河等）である産業遺跡と機械や道具（場合によっては製品）などの動かすことのできる産業遺物」とに分かれる。」これらを調査研究し、必要でかつ可能なものは保存しようというのが、産業考古学の運動だということになる。（なお著者は、「保存」には

便宜的に「記録」も含まれる、といているが、「記録」なしにこの種の研究は成り立ち得ないから、「便宜的」というのは誤解され易い表現というべきである。）

どういものが「遺跡」や「記念物」というにたる価値があるのかが問題となるが、この運動の発祥の地であるイギリスの場合には、産業革命の遺跡や記念物というかなりはっきりしたためやすがあるようである。

日本については、さきの著者らが見て歩いた所にもみられるように、時代はもう少し前後にひろがっているようにみられ、はっきりした定義は与えられていないが、「産業遺跡・遺物選定の基準としては、その産業の発達史の研究に役立つもの、および破壊・損亡のおそれがあり、早急に保存を要するもの、の二点が考えられる」としている（27ページ）。こうみてくると、産業考古学は、技術の歴史を実物にそくして学ぶもので、その実物を調査し、研究し、保存することなのだということがわかる。

こういう研究や運動は、研究室にとじこもっていてできるものではない。各地の博物館、郷土史家、教師、企業人等々、幅ひろい人々の力が必要なのである。産業考古学会はこういう研究や運動の発展をねがって発足した。著者はこの研究会の中心にある人々で、この研究と運動のねらいや方法をわかりやすく解説したのが本書なのである。この学問にふさわしく、地域にあって産業考古学的な研究に関心をもち、実際に活動している人の例があげてあればなおよかったとおもう。

（佐々木 享）

（B6判 255ページ 東洋経済新報社刊、1700円）